

1 門前町から城下町へ

一 荒山神社

(ふたあらやまじんじや)

―下毛野氏の祖、豊城入彦命を祀る―

宇都宮市馬場通り一―
市内バス二荒山神社前下車

宇都宮うつのみやという地名の由来となった二荒山神社ふたあらやまじんじやは、市街地の中心に鎮座ちんざし、市民の精神的な拠り所として厚く信仰され今日に至っている。バスを降りれば目の前に大鳥居があり、石段を上りつめた所に神門しんもん(楼門ろうもん)がある。ここをくぐれば正面に拝殿・本殿ほんでんがあり、四季を通じて参拝客で賑わっている。

宇都宮は、はじめ二荒山神社の門前町として開けたので、「ミヤ(宮)」といえ、市街地そのものをさす場合もあれば、神社そのものをいう場合もある。まさに二荒山神社と市街地は一体化しているのである。だから田川たがわに架かる宮の橋みやのはしは、ここを渡れば市街地に入り、橋は神社へ向かう道標ともなっている。

二荒山神社の起源については定かでないが、神社の名が文献上に現れるのは平安時代に入ってからである。その最初は承和じやうわ三(八三六)年十二月二十

五日の記録で、「下野国、從五位上勲四等二荒神」に正五位下の位階いがいを授けたと見える(『続日本後記』)。時代を経るにつれて位は高くなり、貞観じやうがん十一(八六九)年二月二十八日には、正二位まで進んだ(『日本三代実録』)。



田川に架かる「宮の橋」



参拝客で賑わう二荒山神社

〔注〕朝廷が神々に授けられる位(神階しんかい＝神位しんい)には、品位ほんいと位階いがい・勲位くんいがあった。品位は一品いっほんから四品まで、位階は正一位から正六位上までの一四階、勲位は勲一等から勲二等までの一二等に分かれていた。

二荒山神社に高い位を贈った拝啓には、主祭神が後に記すように崇神天皇の皇子豊城入彦命とよきいりひこのみことであることと、蝦夷えぞ征討にさいして下野の地から多くの兵



本殿勾欄の擬宝珠



二荒山神社の社殿

士を派遣したことなどが考えられる。

だから高い位を授かった二荒山神社は、延長五（九二七）年に編まれた『延喜式』内の「神名帳」に、下野国十二座の筆頭として記され、「河内郡一座大 二荒山神社 名神大」とある。「大」とは毎年二月の祈念祭のあり、国司が幣帛を奉る国幣社のうち、大・中・小に分けた最高位の神社のこと、「名神大」とは国家の大事にさいして臨時に行われる名神祭に預かる大社のことである。十二社のうち大社は二荒山神社だけである。さて、二荒山神社は宇都宮大明神ともいわれ、主祭神は豊城入彦命である。命は上毛野君・下毛野君一族の祖神といい、命を祀る神社は群馬・栃木両県に多く、群馬県に五三社、栃木県に四〇社がある。

二荒山神社が鎮座する丘は白が峰といい、かつてその稜線は南に延びて、現在の馬場通り交番辺りまで及んでいた。この稜線の南端は荒尾崎と呼び、現在の二荒山神社摂社下之宮の地に、

祖神豊城入彦命を祀ったのが神社の創始という。のち承和五（八三八）年、白が峰に遷座し今日に至っている。

古代における二荒山神社は、豊城入彦命の子孫ともいわれる下毛野君一族によって祀られてきた。神社を祀ることとは同時にこの地方を統治支配することである。その後、下毛野君に代わって二荒山神社を祀り、この地方の支配権をにぎったのは宇都宮氏であった。

社伝によると、前九年の役（一一世紀半ば）のさい、宗円は調伏祈禱のため源頼義に随行して下野国へ下向し、宗円の祈禱によって安倍頼時らを平定することができたので、その功績によって宗円は宇都宮社務職に任ぜられ、この地に土着して宇都宮氏の祖になったという。伝承の真偽はともかくとして、宇都宮一族が二荒山神社をめぐる支配権を確立したのは平安時代後期ごろであり、これ以後、宇都宮氏は神社の社務をつかさどる宇都宮・校校と下野から常陸にかけた鬼怒川流域一帯の支

配権をにぎることになった。

その後、二荒山神社は源頼朝の崇敬をうけ、治承四（一一八〇）年に灯油料所の寄進があり、さらに文治五（一一八九）年、奥州藤原氏征討のため当地古多橋駅（別項参照）に着いた頼朝は、まず当社に奉幣し、帰途にも報賽として奉幣している（『吾妻鏡』）。

徳川家康も当社を崇敬し、慶長七（一六〇二）年に神領一五〇〇石を寄進し、さらに天正十七（一五八九）年、北条氏が宇都宮国綱を攻めたとき社殿が焼失しているので、家康は社殿造営



鉄製狛犬



三十八間星兜



前田雀郎の句碑「夢の中 古さと人は 老ひもせず」

を命じ、慶長十（一六〇五）年に再建された。そのとき家康は本殿の勾欄擬宝珠四個（市指定）を奉納している。元和五（一六一九）年、本多正純が一五五〇〇〇石の城主として入城すると、直ちに城内の大改修と整備を行い、これまで上の宮（白が峰）と下の宮（荒尾崎）は丘陵でつながっていたが、丘陵を削って切り通しをつくったので、上の宮と下の宮は分断された。現在の社殿は、戊辰戦争のさい兵火で焼失したので、明治十（一八七七）年

に再建されたものである。大祭の秋山祭は十月二十一日、菊水祭（付祭）は同月二十八・二十九日で、おたりや祭が一月十五日（春渡祭）と十二月十五日（冬渡祭）に行われる。社室には南北朝時代の作という三十八間星兜（国重文）と「建治三（一二七七）年」の銘の鉄製狛犬（国重文）がある。ほかに宇都宮城主戸田忠真が奉納した太刀（県指定）や多数の古文書・古記録を所蔵している。

なお、境内には明治二十二（一八八九）年に建碑された蒲生君平之碑や、同四十二（一九〇九）年建碑の第十四師団建築記念碑、昭和四十（一九六五）年建碑の前田雀郎川柳碑などがある。